

その知らせは母からの電話によってもたらされた。前触れもなく日常に割り込んでくる、いくぶん傲慢な、電話というものの特性のおかげで、風呂上がりのまったりとした時間を有意義に過ごしていたはずのわたしは、唐突に叔母の死を知ることになった。

母は五人きょうだいの二番めで、そのすぐ下の三番めが唯一の男だから、あとはみんな女ばかりということになる。つまりわたしには母方の「おば」が三人いるわけだが、亡くなったのは四番めの叔母だった。

叔母はよくしゃべるひとだった。母を含め（叔父を除く）四姉妹は皆おしゃべりだったが、気のきいた冗談を随所に交えながら早口でまくしたてる四番めの叔母は、子どものわたしからすれば、もっとも聡明で、都会的な女のひとに見えた。それはもしかしたら、姉妹でただひとり独身だったから、というのもあるかもしれない。

母の実家が大阪府の枚方市にあり、そこには四番めの叔母と同じく独身の叔父がひとりで暮らしていた。母はあまり話しながらないが、酒癖が悪く粗野で暴力的だったという祖父はわたしが生まれる前に亡くなっており、夫からの暴力によって悪くした足を引きずりながら晩年を過ごしたという祖母も、わたしが五歳の頃に亡くなっている。祖父母がいなくなつてからも叔父が暮らす枚方市の一軒家には、散り散りになった四姉妹たちが、事あるごとに集まっていた。

母は結婚して大阪市内に移り住んでおり、枚方に近かったため、幼いわたしと弟と妹、三人の子どもを連れ、よく実家へ泊まりにいった。そして四番めの叔母もまた近くに住んでいたの、示し合わせていっしょに行くことが多かった。

わたしたちは枚方へ行く時は必ず、行きも帰りも京阪電車を利用した。叔母とは行きは現地集合のことがほとんどだったが、帰りは同じ電車に乗った。平日の昼下がりの乗客は少なかった。子どもたち三人は準急の緑のシートに並んで座り、通り過ぎる田園風景を眺めながら居眠りしていた。そのあいだも、母と叔母は機関銃のようにしゃべりまくっていた。わたしたちは大阪へ帰るため天満橋まで乗ったが、叔母はいつも寝屋川市の香里園で降りていった。わたしはてっきりそこに彼女の住まいがあるのだと思っていたが、どうやら不倫相手のところへ行っていたらしいと後年教えられた。

遊び道具が何もない枚方の家で退屈しているわたしたち甥や姪を、叔母はよく連れ出してくれた。パチンコ屋に寄るついで、ということもしばしばあったが、本屋に連れていってくれることが多かった。彼女はたいへんな読書家で、海外もののサスペンスやミステリ小説を好んで読んでいた。そのためか、本屋に行くと決まって「ひとり二冊まで、選んできいよ」といってわたしたちにも本を買ってくれた。子どもらがこぞって漫画本を持ってこようが、分厚いゲームの攻略本を抱えてこようが、いっさい構わず気前よく支払ってくれた。大人になつたいま、あの頃のお礼をしようと思えばいくらでもできたはずだった。けれど、それも叶わぬまま、叔母は死んでしまった。

四番めの叔母と、彼女以外の姉妹との仲がぎくしゃくしはじめたのは、二十年以上前だろうか。もしかしたらもっと前からその兆しはあったのかもしれないが、わたしには知りようがなかった。

二十四年前の九月、叔父が亡くなった。わたしは十五歳で、その日は高校生になつてはじめての文化祭だった。はしゃいだ気もちを抱えたまま家に帰つたわたしは、玄関先で待ち受けていた母にその事実を伝えられた。いまからお父さんと枚方に行ってくるから留守

を頼むわ、と母は青白い顔をしていった。

叔父の死因は心臓発作だと教えられた。だが、後に知った真実は違っていた。叔父は、定職に就けずきつい夜勤の仕事ばかりで、ギャンブルによつて抱えた借金にも苦しんでいた。若い頃に結婚を望んだ女性がいたそうだが家族の反対にあつて断念しており、その後ずっとひとりだった。叔父は、どうしようもなくなくなって生きるのをやめた。働くのをやめ、食べ物をお口にするのをやめ、ついには呼吸することさえやめてしまった。積極的に死を選んだわけではなく、生きるのをやめた。とても叔父らしい死に方だと思つた。

叔父は、彼の部屋のベッドで、静かに眠るように亡くなつていたという。その遺体を発見したのが四番めの叔母だった。いつものように、手みやげとちよつとした食料を持つて訪れた家で、亡くなつてから何日か経つた兄の姿を見つけたときの彼女の衝撃は、計り知れない。

彼女は、兄の死の責任を、自分を含めた姉妹に向けた。もつと彼のことを気にかけてやつていれば、もつと何かしてやれることがあつたかもしれないのに。もつと、もつと。

その辺りから、残された四姉妹のあいだに亀裂が入りはじめ、その後何度も修復と崩壊を繰り返し、やがて完全に決裂することになる。叔母は、家族との縁を、自分から切つてしまつたのだつた。

大人になつてからの諍いというものは、ほんとうに修復が難しい。それから一度も、家族の誰も叔母には会つていない。

叔母がどこに住んでいたのかも、はつきりとしたことは誰も知らなかつた。なのに今回彼女の死が判明したのは、昨年（二〇二二年）の夏の終わり頃、彼女が最後に住んでいたマンションのオーナーから母に連絡があつたからだつた。オーナーは、叔母の戸籍から姉妹の存在を知り、そのうちのひとり（つまり母）が近くに住んでいるということ突き止めたようだった。驚いたことに、叔母は縁を切る直前まで住んでいると思われていた大阪の谷町に、最後まで住み続けていたようだ。そこは、愛人から提供された住まいだと姉妹のあいだで噂されていた場所だった。愛人との関係も最後まで続いていたのであるか。

叔母は誰にも知らせずひっそりと病院で死んだらしい。そのため、マンションの部屋が整理されないまま放置されており、何か月もの家賃が滞納されているとのことだつた。オーナーはまず、連帯保証人になつていた愛人の（と思われる）男性に連絡を取つたそうだが、自身の経営する会社が傾いており、とてもじゃないがそのようなお金は払えないと首を振られたようだ。困つたオーナーは叔母の戸籍を調べ、姉である母のもとへつようよう辿り着いたのだと見られる。

法律をかじつたことのある我が弟は、話を聞くやいなや、すぐにでも相続放棄の手続きを行うべきだと主張した。でなければ、家族の誰かしらが滞納分の家賃や部屋の整理にかかる費用を支払わなければならなくなるから、と。それは正論だつた。現実問題、母にその費用を捻出することはできないし、他のおばたちも、長年連絡のなかつた姉妹の残したものの始末をつけてあげようという気はないようだった。

ただ、わたしは少し不満だつた。オーナーからもたらされたのは叔母が死んだという事実だけで、その死因や最後の様子などはまったくわからないのだつた。どうやら病院で亡くなつたらしいということだけはわかつているが、個人情報保護のため、家族であつてもどこの病院に入院していたのかは教えられない、とのことだつた。

叔母の家に行くことさえできれば、きつと何かしらの手がかりが掴めるだろう。どこの病院だったのかもわかるかもしれない。とにかく病院に行つて事情を説明すれば、叔母の最後がどんなものだったのかを聞くことや、もしいるのであれば彼女を看取つてくれたかもしれないひとを探し出すことだつて、可能かもしれない。このまま法的な手続きを進め

てしまえば叔母の部屋に入ることは叶わなくなる。それができるかもしれないのは、いましかなかった。

けれども、母は「もういいよ」といった。そんなことは面倒くさい、と。もうずっと連絡すらしてこうへんかった妹やし、家に行ってみていろんなことを今さら知ったところで何ができるわけでもないんやし。そういうことをするには、元気がいる。残念やけど、わたしはもうしんどい、年を取り過ぎたわ、と。母は、確かに年を取っていた。あたり前ではあるけれど、あの頃よりも遙かに年老いていたのだ。そしてようやくそこで、死んだ叔母も年を重ねていたのだというまぎれもない事実に気がついたのだった。

叔母は母のよつつ年下だから、享年七十二歳。わたしが知っている叔母は、まだ四十代の、若々しく澁刺とした、聡明で、都会的な女性だった。年を取った叔母の姿は、どうやっても想像することはできなかった。ましてや死んでしまったなどということを受け入れるのは、いっそう難しかった。

十五年前、わたしが結婚したときに、その頃彼女が住んでいると思われる住所に招待状を送ってみた。驚いたことに、返事などくるはずがないと思っていたのに、切り離された往復はがきの片割れが戻ってきたのだった。そこには、欠席につけられた丸印と、谷町の住所が書かれてあった。かわいがっていた姪が結婚するということに、かたくなだった叔母も、さすがに心を動かされたのだろう。そのはがきは、八年後に離婚した際、持つて出てくることができず、叔母の確かな住所も、彼女が残した筆跡も、もう失われてしまった。

わたしたちは、叔母を弔ってやることすらできなかった。誰かが彼女をきちんと埋葬してくれたのかどうかも、わからない。彼女がどこに眠るのかを、わたしたちはまったく知らないのだ。自己満足でしかないのかもしれないけれど、彼女のために回想することが、彼女のために祈ることの代わりになれば、と思う。

(了)